

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

精神障害の「病名称用語」、現状の問題と課題

座長 松下 昌雄, 柏瀬 宏隆

近年、新しい診断基準 DSM, ICD の普及、2002 年の精神分裂病の統合失調症への呼称変更、また行政用語として認知症のマスメディア、出版界などでの普及、更には専門医制度の発足（ケースレポートが受験のための必須要件になったため）などが前提となって精神科用語再検討の要望が高まった。これを踏まえて3年前に本学会に精神科用語検討委員会が発足し「精神神経科用語集改訂6版」（旧版は1989年）の委員会試案が学会ホームページに掲載され広く会員からも議論が沸き起こった。統合失調症は比較的スムーズにその使用が普及したが、認知症に関しては他科とも関連する用語なので用語委員会でも現段階では認知症と痴呆（症）を併記し今後の推移を見守っている。一方、うつ病、抑うつ、についても種々議論が沸騰した。DSM, ICD の Depression の訳語が変遷し、やや混乱し、特にマスメディアでは気ままな使われ方をしている、正しい知識の普及という観点からも問題が多い。そこで今回のシンポジウムではそこを中心課題とした。そのほか、社会不安障害、行為障害、外傷後ストレス障害もその概念を正しく表現していないので修正すべきであるとの意見がありそれも取り上げた。第1席：病名称変更がもたらしたもの—「統合失調症」の経験から—（西村由貴）は、「統合失調症」に

関し、統計上の数字から、用語の普及も病名告知も進み、一定の成果があった。しかし必ずしも十分ではなく、今後中高生の学校教育、コメディカルへの教育を開発する必要があると主張した。第2席：英語からの翻訳病名用語は妥当だったか—「社会不安障害」、「行為障害」、「外傷後ストレス障害」の場合—（豊嶋良一）は、この3用語について一般人を対象にしたアンケート調査をした結果、誤解が大きかった。その結果、望ましい翻訳のあり方として、①分類や命名の理念を反映したものである、②伝統的用語との異同や関係性を反映したものである、③英語の原意にふさわしい日本語である、④一般人にもおおよそ症状内容が推測できる、⑤他の用語と混同・誤解されない、⑥偏見を助長しない、⑦簡潔である、という基準私案が示された。第3席：「うつ病」はどの範囲を指すのか—「うつ」、「うつ病」をめぐる混乱—（太田敏男）は、「うつ病」「うつ」が普及するなかで混乱が生じ、治療上の観点からも看過できない。そこで、①「うつ病」は病名としてのみ用い、他は「抑うつ」を充てること、②「うつ病」は国際的な疾患分類体系のうち特定の障害（群）の別称として学会が推奨すること、を提案した。なお、用語委員会では「うつ」は採用していない。第4席：うつ病概念の拡大と混乱—うつ病の呼称との

関連の視点から一（樋口輝彦）は、うつ病の啓発が進んだことで偏見が軽減され、社会全体の課題になった点は評価できる一方、①「うつ病概念の拡大」、②うつ病自体の病像の変化、③軽症うつ病の問題、が生じた。うつ病概念の整理が必要と警鐘を鳴らされた。第5席：障害・疾患・症状の呼称と翻訳をめぐる問題点：精神科用語検討委員会における議論を踏まえて（江口重幸）は、わが国の精神科用語の歴史を詳細に述べ、病名呼称や専門用語は一体だれのものかという問いを投げか

けた。特定の障害や疾患は、時代の「生態的ニッチ」に沿って生息、流布、消退する。他国語への翻訳の壁を越える際に意味の変更を被る。用語の歴史的・時代的な文脈とそれが喚起する外延を意識することが重要であると結論した。なお、他に精神病などの変更を求める声もあり、今後も検討課題は少なくない。20年振りに「用語集」が改訂され、マスコミにも取り上げられたが、精神科用語への関心が内外で高まれば本シンポジウムの意義も大いにあったと考える。